
The black prince , Re-Start ?

神暁 緋煌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The black prince / Re - Start ?

【Nコード】

N6197V

【作者名】

神暁 緋煌

【あらすじ】

サイトに公開（但し、訪問者は微少。サイト自体は検索避けしてある為）

ギャグ交えつつ、劇ナデあふたー話。
ハッピーエンドが好きです（知らん笑）

囚われの王子様

「……………」

アキトは自分の手を見つめた。触感と体温調整を補うためにスーツに身を包み、視力を補うためにバイザーをつけた自分の格好は不審者以外何者でもないだろう。

実際、ルリにコンタクトを取りに地球へ降りた際、連れていたらピスと相俟って、幼女誘拐犯として追いつけられかけた。その際はラピスが警察に歯向かった為、別のことが問題になりかけたが。それはさておき。

ナデシコもといルリとネルガルがタッグを組んで、軍とヒサゴプラン、それとクリムゾングループの闇を暴き出した。それによってアキトはコロニー虐殺のテロリストから一転して悲惨な惨劇の被害者としてメディアが扱い出した。その勢いにおされて、最近政府は指名手配を取り消したというのだから、どれだけ民意が強かったのか甚だ疑問ではある。

それにより、アキトの体内事情を知った各国の医療機関が彼の治療に協力を申し出てきた。が、実験のような扱いにアキトが嫌悪を示し、アカツキとイネスで持つて丁重に断り続けているそうだ。実験的扱いはアキトの思い込みではあるが、体よく本気で実験体にしたようとした某国なんか逆ギレして襲いかかってきたりした。まあ、そんなのは、アキトが再起不能にまで叩きのめしたりしている。ちなみに再起不能にしたのは、単純に手加減ができないからなのだが。

「……………」
「ユリカ」

妻であるミスマル・ユリカは、アキトより軽傷で持ち前の明るさ・パワフルさで、あっさり完治。アキトがいつ帰ってきてもいいように、ひとりで屋台を始めたという。ルリや旧ナデシコクルーが手伝って、賑わっているという。ユリカもルリも仲間たちも、それもこれもみんなアキトのためにやっていた。アキトが戻ってこれるように、と。当のユリカはそれに専念するため、一旦軍を休職中だという。コウイチロウの配慮で、ユリカは屋台をやる代わりにコウイチロウが管理するアパートに住んでいるのだという。

ちなみにこれ全部何故かラピスから聞いた。誰が彼女に吹き込んだのだろう。イネスかエリナかアカツキか。

「……………俺は、」

両手は血にまみれている。食材になど触れるわけがない。直接手は下していなくとも、だ。

「アキトくん、ちょっといいかしら？」

「！」

イネスの声に、ハッと思考の淵から舞い戻った。一瞬ドキッとしたからか、ぼうつと淡く顔が光る。

「致死量入ってて、かつ互いが互いの効果を打ち消し合ってるナノマシン、どうやら消せそうなんだけど……副作用が大きいのだよ、ど

うする？」

「副作用？」

「身体への負担もかなり大きいわね。術後1年はまともな生活を送れないかも知れないわ」

「……………治る見込みが？」

「60%はあるわね」

「……………高いな」

「でしょう？ アキトくんに叩きのめされた某国がお詫びにとくれた研究データにあったの。今現存するナノマシンを破壊することができるナノマシンらしいわ。ただ身体に入れたら最後、身体に潜むナノマシンをすべて破壊してしまうから、IFSが使えなくなるわね。あとから入れても、先5年はその破壊ナノマシンが壊してしまおうそうよ。だから、手術をしたら向こう5年はエステバリス使えないと思ってくれば」

「……………そんなものが」

開発されていたなんて、とアキトは蒼白だ。

ちなみにお詫びにもらったのは正確には襲ったなんて知られたくなくば、見返り寄越せ、と黒の王子が直々に強請り取ったらしい。酷い。

イネスは蒼白なアキトを見て口を開いた。

「どうする？」

「副作用は……………？」

「ええとね……………」

ぱらりと書類をめくる音がする。

「身体の一部の色が変わるそうよ」

「一部？」

「ええ。それがひとによって変わる場所が違うんですって」

「……………」

「考える時間あげるから、少し考えたほうがいい」「いや、やる……………え？」

「……………どうせ死にかけた命、戻れる可能性があるのならやらないよりはやるべきだろう」

「……………お兄ちゃんがいいならいいけど。じゃあ検査のために明日から隔離させてもらおうわね」

「……………今と何が違う？」

「今は強制入院。ちゃんと外界と接点持たせてあげてるでしょ？」

外界⇨ラピス。

ラピスに泣き落としを仕込んで、アキトを捉えたネルガル。そうして今、アキトはネルガルの関連病院で強制的に入院させられているのだった。

「治る可能性ができたんだからいいじゃない。いつまでも昔のことを怒るなんてらしくないわよ」

「……………昔のことを怒ったから、復讐鬼になったんじゃないか」

「……………まあ、それはそれ、これはこれ、よ」

「……………」

逃避の王子さま

というわけで。

目がルリのような金色と、深い血のような緋色に変わったアキト。鏡を見たとき、目を見開いて止まっていたのをイネスは見た。

結局例の破壊ナノマシンには、アキトの体内に入ったナノマシンの量は破壊しきれなかったようだ。致死量入ったものが半分くらい破壊された、らしい。体内に残ったナノマシンが反応しあって、マシンチャイルド並みの処理能力とIFSが際立って現れ、手の紋様が変わってしまった。

目の金色はおそらくそのせいなんだろうな、とアキトはしみじみ手の紋様を見つめたのだった。

「……………」

ぼんやりとベッドから外を見る。視力は前は瞳孔が開ききつていたため、どんな暗闇でもちいさな光を見ると、異常なほどに眩しく見えていたが、今はぼんやりと滲んでいるだけで目に優しい。まあ、ぼやけているのでまだ補助を必要とするが。

「アキトくん、」

聴力も難聴の域なため、明確に聞き取るうとするなら、補助が必須だ。その補助はバイザーで補っていた。

イネスらしき声を捉えて、アキトはバイザーを装着した。

「?」

どうも頭にナノマシンが密集していたために、喉付近に負担がかかってしまった。そのせいか、一時的ではあるが、声が出なくなっってしまった。

「お客様よ」

「??」

「入ってかまわないかしら?」

無表情のまま、こくりとアキトは頷くと、煩わしいのかバイザーを取り払って、そのままベッドに埋もれた。

「アキト!」

聞き取りにくい耳でもその声は自然と浸透した。ぼんやりとしていた視界に光が過った気がして、アキトは慌てて身を起こした。イネスとともに入ってきた人物は、アキトの視線がさまようのを見て、イネスに声をかけた。

「抱き付いても大丈夫?」

「ええ、問題ないわ」

何の話だ。

「？」

「アキト！」

アキトが訝しんで眉をひそめると同時にそのひとはアキトに抱きついてきた。

「アキト！ 逢いたかった！！」

「！」

ユリカだ。

ユリカだとわかった瞬間、アキトは腕を突っ張り、その腕から逃れようとじたばた暴れた。しかし、術後で体力が落ちているため、ユリカをはね除ける力がないらしく、しばらくばたばたしてたが、力尽きて動かなくなった。残念。

「ど、どうしたの、アキト。ユリカのこと嫌いになっちゃったの…」

「自分の手は、大量の罪なき人を虐殺してるから、艦長に触れる資格はないと思ってるのよ」

イネスはそう答えると、傍らに放り出されているバイザーを手に取り、アキトの顔にそれを装着させた。

「お兄ちゃん」

「！」

びくつ、とアキトが動きを止めた。イネスの真剣な声色に、恐る恐る視線を上げるアキトに、イネスは優しく微笑した。

「いつまでも逃げ回ってられないでしょ？ 同じ宇宙に生きてるんだから」

「……………」

しゅん、とおとなしくなってしまったアキトを抱き締めたままのユリカは、イネスを見上げた。

「イネスさん！ アキトを苛めちゃダメですよ！」

「あら、うふふ、ごめんなさいね。それじゃあ、私は隣にいるから」
「わかりました」

イネスが部屋を出ていくと、ユリカはようやくとアキトを放した。アキトは呆然とユリカを見た。

逢うつもりはなかった。ユリカの中でアキトは2年前で止まっているだろうから、拒否されるのが怖かった。

だが、違った。ユリカはわかっていた。月日がアキトを変えてしまったことを。

まあ、自分の為だったからこそなんだろうけども。

お姫様と王子様

「ねえ、アキト」

「……………?」

「ルリちゃんから全部聞いたよ。アキトは私を助けてくれたんでしよう?」

「……………」

ユリカの目をバイザー越しだが、ひたと見つめて、アキトは頭を振った。アキトはユリカを追い求めただけで、ユリカを救出したのはナデシココの面々だ。

ユリカを目の前で奪われて、次に見たのがアマテラスで同化というか融合している姿、そして今なわけだから。

「うっん。言ったでしょ、アキト。ルリちゃんから聞いたよって。アキトがヒサゴプラン管轄のコロニーを襲撃していたからこそ、真実が発覚して、ルリちゃんたちも動けたんだって」

「……………」

正確にはルリが動いたのではなく、ユリカの父コウイチロウが動いたのだが。

「あ、ねえ、アキト。私、ラーメン作れるようになったよ」

「!!--」

「みんなから合格点もらったもん。だから、ねえ、また屋台やろう」

「よ

「……………」

ユリカが、アキトを助けなくちゃ、と学んだ料理はルリに一刀両断されていたのを、アキトは思い出した。ルリが作ればよかったのだろうが、張り切るユリカの邪魔はできない、とルリが何故か講師になっていた覚えがある。

「だいたいね？」

「……………」

「直接じゃないけど、間接的に手をかけた人殺しなら、私たち全員そうでしょ？ 戦争やってたわけだし。……何より、私たち、火星のひとたち見殺しにしたんだよ?!」

「!?!」

そうだった。

泣きそうなユリカの肩に額をつけて、アキトはうつむいた。殺してきた量はアキトのほうが多いが、罪なきひとを殺した、というならナデシコの面々もそうなのだ。

「だから犠牲にしてしまった彼らの代わりに私たちは生きなくちゃダメだよ。ね、アキト」

「……………」

アキトが頑なに黙り込んでしまったのを見て、ユリカはしゅんと

肩を落とした。ダメだったか。すぐに思い直して顔を上げる。

「あ、あとね、」

「……………」

アキトが顔を上げた。

バイザー越しの目がぼんやりとユリカを見つめる。そういえば、ナノマシンの量を減らすことはできたけれど、実験で脳を掻き回された影響、ぼつとナノマシンの奔流が感情の動きとともに顔を光らせるのはどうにもならなかったとイネスが言っていた。

「ラピスちゃんは私とルリちゃんが預かりました」

「……………」

「ルリちゃんは妹ができたって喜んでるよ。ラピスちゃんもミナトさんを始めとするみんなに可愛がられてるよ。ラピスちゃんもなついでるしね」

「……………」

それが心に残ってたのだろう。アキトは安心したように微笑した。目は見えないが、口元がわずかに綻ぶのが見えた。

みんなアキトから感情が消えたといっていたが、こう起伏がわずかながら見えるんだから、試してみたっていいと思う。

反応の少ないアキトにユリカは思いきって言うてみた。

「……………ねえ、アキト」

ユリカがぼつりと口を開いた。アキトがふと視線を上げた。

「せめて……、せめて、みんなに姿見せてよ！ 火星の後継者の争いのときには、一部のひとにしか姿見せてないんでしょ？ みんな……みんな心配してるんだよ？」

ユリカの妥協案に、アキトはハッと顔を上げた。ややあつて恐々頷くを見て、ユリカはほっとした。アキトの気持ちが変わる前にとユリカはコミュニケーションを起動させてイネスを呼び出す。

「イネスさん！」

「あら、なあに、艦長」

「アキトの外出許可もらえますか？」

「あら、ついに姿を見せる決心がついたのね？ いいわよ。私もついていくし。いつ行く？」

「早ければ早いほうがいいです！」

「そうねえ。……今日はアキトくん疲れてるでしょうから、明日にしましょう。一応術後だし、様子を見ないとね。それに艦長、みんなに連絡しないと」

「そうですね！」

ユリカがぱああと顔を輝かせたのを見て、アキトはびくっ、と少し引いた。

そこへ隣室からイネスが戻ってきた。

「ああ、やっぱり今日はやめて正解だったわね。アキトくん、実感ないでしょうけど、微熱が出てるわ」

「！」

「ええっ！ ご、ごめんね、アキト。……んっ、じゃあ、明日お昼過ぎに迎えに来ます！」

「わかったわ。こちらも万全の状態にしておいてあげる」

「はいっ。じゃあ、またね、アキト。今日は会ってくれて嬉しかったよ！」

ユリカが笑顔で立ち去るのを見送り、アキトは意識を失った。ふらりと落ちそうになるアキトを寸前で抱き止めて、イネスは息をついた。

不意打ちではあったが、アキトがちゃんとユリカと対面してくれてよかった、とイネスは思っていた。

「アカツキくん」

「おや、ドクター。どうしたんだい？」

「車椅子を用意してもらえるかしら？」

「車椅子？ ああ、そういえば艦長が来てたんだよね。面会できたの？」

「あら、情報が早いわね。ええ。艦長が帰るまでちゃんと意識を保つてられたわ。だから大丈夫でしょう」

「オーケー。明日の朝、届けるよ」

「ありがとう」

通信を終えると、イネスはアキトの身体をベッドに横たわらせる。そうして、そのまま馴れた手付きで触診する。

温度を感じる感覚が壊れたままなので、自分の体調の変化に気付けないのが難点だったが、それにはユリカが気付いてくれるだろう。今回は久しぶりすぎる対面にユリカは嬉しさが勝ってしまったが、ユリカはアキトに関することには敏感だから大丈夫だろうと思っっている。

「お兄ちゃん、みんな待ってたんだよ」

アキトが自分から出てくるのを、みんなみんな待っていたのだ。

あれから1年の月日が経っている。ネルガルの月ドックに帰ってきたのを捕まえて、強制入院させたら動けなくなったアキト。無理に無理が祟って、あちこちガタが来ていたのだ。ラピスが泣きそうな表情を見せたから、イネスがラピスに泣き落としを仕込んで、ラピスが大人になるまで死んだらいけない、と言いくるめて入院を受諾させた。

治療を受けたことをルリがハッキングして知ったそうさ。ルリが自分から出てくるまで待つ、と言ったから、みんな待っていたのだ。それでも拒絶していたから、最後の最後、奥の手で、ユリカに来てもらったのだ。やはり、ユリカを助けるために復讐鬼に身をやつただけあって、ユリカのことばに感情の起伏が見えた。今までは感情が消えたんじゃないかと疑うくらい冷淡だったのに。

「ほんっと、艦長さまさまね」

くすくす、とイネスは笑うと、部屋を後にしたのだった。

閑話休題 女たちの集い

アカツキによつて、ルリとユリカのもとへ預けられたラピスは、ユリカの熱烈な歓迎を受けて、たじたじになつていた。昔のルリよりも感情の起伏の少ない少女が困っているのを見て、ルリは容赦なく引き剥がした。

「ダメですよ、艦長。いたいけな少女が困ってます」

「ええーっ？ だって、こんなに可愛いのに……」

「それとこれとは話が違います」

「ぶうー」

ルリにはっさり一刀両断されて、ユリカは頬を膨らますも、すぐに気を取り直して口を開いた。

「えっと、ラピスちゃんだっけ。私をお母さんと思ってくれると嬉しいな！」

「艦長がお母さんだと、私はお姉さんですか？」

「そっだよー。美人姉妹でお母さんは嬉しいな！」

今度はルリとラピスを纏めて、ぎゅうつとユリカは抱き締めた。ラピスにはいまいちよくわからなかったが、敵意はないし、何しろアキトが命を懸けてでも奪還したかった女性だったから、とりあえずされるがままだった。アキトから話を聞かされて逢ってみたかったからかも知れない。

「アキトがお父さんで、ユリカがお母さんでしょ？ それでルリちゃんもラピスちゃんが仲良くしてくれたら何の心配もないよね」

「ラピスさんが私の妹ですか」

「そうだよ。あれっ、ルリちゃん嬉しくない？」

「いいえ、嬉しいです」

「ルリと仲良く？」

ぽつりとラピスがつぶやいた。きょとんと大きな瞳開いて首を傾げる。

「ルリと仲良くする」

こくとラピスが片言でつぶやいて頷くを見て、可愛い！とユリカが力いっぱい抱き締めてきたのを、ルリは渾身の力で引き剥がした。

ルリちゃんひどい、と落ち込むユリカと、きょとんとしているラピスの隣で息を荒らげているという珍しい姿のルリがいた。

「あ、となると、ハーリー君も息子になるんでしょうか？」

「ん？ だあれ？」

「ハーリー君は私の副長補佐です。私の弟みたいな子です」

「えっ、そうなの？ 逢ってみたい！」

「じゃあ、機会あったら連れてきますね」

「楽しみにしてるね」

「ハーリー？」

わくわくとしたユリカの声に掻き消されかけながら、ぽつりとラピスが首を傾げた。

「はい。ラピスさんと同じくらい的年頃だと思いますよ」

「ハーリーは……エット、お兄サン？」

「そうですね。……嫌ですか？」

「ウウン、嬉しい」

大きな瞳をぱちぱちと瞬かせて、ラピスがふるふると頭を振った。

「ソレに」

「それに？」

「アキトから、オハナシ聞いてた。から、ユリカ、と、ルリ、会ってみた、かった」

ぽつぽつとラピスが告げるのを聞いて感極まったユリカが再びぎゅゅとラピスを抱き締めた。

「ありがとう。アキトを守ってくれて！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6197v/>

The black prince , Re-Start ?

2011年8月9日11時12分発行